

重度・重複障害児における共同注意関連行動と  
目標設定及び学習評価のための学習到達度チェックリストの開発

第1章 重度・重複障害児の共同注意に関する行動と学習評価

## 第1節 障害と共同注意に関連する行動についての研究動向

### 1. はじめに

乳児は、誕生後に母胎から外界へと環境の変化に適応し、視覚や聴覚等の感覚によって、自分を取り巻く外界、環境を理解し始める。生後3か月頃には、周りを見まわすことができるようになり、寝ていて自由に首の向きを変えることができ、動くものを目で追えるようになる。さらに、「ア・ウ」等の声を出し、大人の顔を見つめ、笑いかけ、次第に社会的、心理的な表出へと変化させる。

大人はこのような乳児の行動に気づき、感受性豊かに受け止め、言葉やしぐさ、身体接触で応答する。そのことにより、子どもは自分がした行動の意味を理解するようになり、特定の大人との間で相互的なやりとりが安定していく。

このように社会的な関係が形成され、大人との相互的なやりとりを安定させ、簡単な言葉で、自分の意思や欲求を表現し、コミュニケーションが可能となる。このためには、その前提に、子どもと大人との「共同注意 (Joint Attention)」が重要であることが多くの研究で指摘されている。

### 2. 共同注意とは

共同注意とは、他者と関心を共有する事物や話題へ、注意を向けるよう行動を調整する能力とされている。例えば大人が指さしたおもちゃに、子どもが視線を向けて、「おもちゃがあそこにあるよ」という大人の気持に気づき、「わかったよ」と確認する等の行動である。この共同注意の成立が特に重要なのは、大人との相互的なやりとりの基盤であると同時に、子どもがその後獲得する認知能力や言語能力の基盤を獲得したことを示すからである (Bakeman & Adamson, 1984)。さらに、共同注意場面は、乳児が事物の特性や機能を学習する機会となっているからである (Landry, 1995)。

大神 (2002) は、この共同注意を、子どもが三項関係 (自己-対象-他者) を形成させる重要な要因と考え、乳幼児期における共同注意行動が形成されるまでの発達特性について検討している (図1)。その研究では、障害の可能性の高い子どもがどのように共同注意を発達させるかの分析も課題としている。

### 3. 重度・重複障害における共同注意

重度・重複障害児の対人的行動発達やコミュニケーション行動の発達を検討していく際に、この共同注意は、どのように取り上げられているのだろうか。

徳永 (2000) は、肢体不自由を伴う重度・重複障害児の前言語的対人相互交渉に関する研究動向を検討して、重度・重複障害児の教育において乳幼児研究を手がかりとした研究の広がりは見られず、「コミュニケーションのとらえ方と子どもと大人の関係性の課題が取り上げられ、具体的な相互交渉のために子どもが示す行動が検討されていない」としている。

つまり、関わり手の子ども理解や関わり手の態度を検討する研究、また1970年代の発達研究を基盤とする研究が多く、これらの研究は子どもへの関わりを吟味する上では重要であるが、子どもの行動評価や発達程度を理解する上では活用できない。また、徳永 (2003) は、重度・重複障害児の行動指標を取り上げ検討する研究が少なく、重度・重複障害児の対人行動をみていく体系的な指標がないことを指摘している。

発達年齢	共同注意関連行動		運動・言語	
月 齢 日数				
6ヶ月 183			173 座位	
7ヶ月 213				
8ヶ月 244	253 視野内の指さし理解	} <b>他者意図の理解</b>	226 つかまり立ち	
9ヶ月 274			277 つたい歩き	
10ヶ月 304	311 視線追従			
11ヶ月 335	332 交互凝視 (確認)	} <b>社会的参照</b>	359 歩行	
12ヶ月 365	347 後方の指さし理解			
13ヶ月 396	357 応答の提示・手渡し 381 自発的提示・手渡し 390 要求の指さし		} <b>遊び・表象</b>	387 なぐり書き
14ヶ月 426	402 交互凝視 (催促)	407 機能的遊び		423 単語模倣
15ヶ月 457	423 共感の指さし	} <b>向社会的行動</b>	448 ふり遊び	458 積み木積み
16ヶ月 487	427 交互凝視 (共感)		430 からかい行動	483 走る
17ヶ月 517	460 他者の苦痛への反応		487 有意味語 511 命名	
	483 応答の指さし	513 いたわり行動		

図1 共同注意関連行動の出現時期 (大神, 2002)

そして、共同注意に関連する行動から、重度・重複障害児の対人行動の発達を概観し、それらの行動指標の開発が重度・重複障害児の対人的行動を理解する上で重要になるとしている。

#### 4. 近年の研究として

重度・重複障害児の発達評価や指導において、この共同注意についてはコミュニケーション、対人相互作用の形成として、近年にいくつかの研究が取り上げている。

古山（2004）は、重度・重複障害のある子どもに対して、トランポリン活動や音楽活動などの三項関係を重視した活動をとおして、「表象としてのバンギング行動」から「自発的身振り行動」へ移行するコミュニケーション行動の発達変化について検討している。そこでは、バンギング行動から自発的な身振り行動に変化する中で、かかわり手の意図理解に基づく身振り行動と発声が同期していたとしている。

また、西村（2004）は、運動障害を伴う重度・重複障害児に対して、手を中心とする身体接触を用いた相互交渉を行い、その反応の変化を検討している。そこでは、視線、身体運動、発声、表情を反応指標として分析し、身体間のコミュニケーションとして、応答的な発声や笑顔、身体の動き等が増加したことが示されたとしている。そして、原初的なコミュニケーションにおける身体接触を用いた働きかけの意義について考察している。

これらの研究は、子どもの視線や自発的身振り、身体運動を取り上げ、対人的相互交渉における行動変化を検討した研究である。

さらに、古山・徳永（2005）は、重度・重複障害児に対して、スイッチ操作によるキャッチボール遊びにおける三項関係（自己－玩具－他者）を通して、視線による行動変化について検討している。そこでは、スイッチ操作によるキャッチボール遊びを通して、スイッチや玩具などの具体物への「注意の共有」が可能になり、距離的な課題はあるが音声呈示に伴う指さしの理解、自己操作へ移行することがみられたとしている。重度・重複障害児の共同注意行動の形成は、音声呈示を前提として、頭部の動きを伴う視線や指さし、身体的共同操作などを踏まえることが重要であり、「注意の共有」から「意図の共有」へと発達し、行動による文脈理解も影響していると考察している。

また、古山（2005）は共同注意行動及び乳幼児の発達研究を手がかりに、重度・重複障害児の三項関係におけるリーチング行動からの手指し行動への発達に関する実践を報告している。その研究は、「他者の注意や意図に関係ない玩具へのリーチング（自己－対象物の二項関係）」から、「他者による玩具へ指さしへの注意定位、応答的要求発声」へ、さらに、「他者への自発的要求発声」や「要求としてのリーチング行動」とともに「目によるポインティング」等の行動がみられるように変化したとの報告である。そこでは、重度・重複障害児においては、乳幼児の共同注意行動の出現時期は異なるが、「他者意図の理解」や「応答の提示・手渡し」「指さしの産出」など、三項関係の中で共同注意行動が発達する可能性が示唆されている。

このように、重度・重複障害児の対人行動の形成過程について、共同注意関連行動を手がかりとする研究が積み上げられてきている。

一方、対人行動形成における感覚モダリティの課題については、徳永（2003）が身体接触の重要性を指摘している。また、阿部（2005）は、肢体不自由養護学校の重複障害のある子どもを対象として、靴を脱ぐという活動を取り上げ、その活動の中で生起する二項関係、三項関係について検討している。視覚的な注意の共有を分析しているものの、視覚以外のモダリティの注意の共有についても重要と指摘している。

この感覚モダリティについては、視覚障害における支援に関して、新井・小田（2005）の研究がある。そこでは、重度の視覚障害のある乳児と母親の相互コミュニケーションについて観察を行い、初期のコミュニケーションの特徴と発達の影響について検討している。母親の行動として、子どもの視覚的注意を

促す行動はなく、触覚や聴覚などを使用した非視覚的な方法によってコミュニケーションを行っていることが示され、両者が同一の対象に注意を向けている共同注意について、①母親による子どもへの触覚的働きかけと母親による対象物や状況の記述が同期している場合、②子どもが探索行動をしている同一対象と母親による対象物や状況の記述が同期している場合を取り上げ、後者の生起率が低いことを示している。

## 5. おわりに

乳幼児の発達研究を手がかりに、子どもが大人とのやりとりの中で、対象物を手がかりに、お互いの注意や意図を考慮したやりとりが形成されるまでの共同注意関連行動を取り上げた。そして、重度・重複障害のある子どもが物の操作や大人とのやりとりに示される二項関係から、対象物を手がかりに大人とやりとりをする三項関係を形成する過程を取り上げた研究を概観してきた。

この共同注意に関連しては、「心の理論」として、自閉症の子どもについての研究が数多くある。また、ダウン症等の知的障害のある子どものコミュニケーションについて検討している研究もある。

障害のある子どものコミュニケーションや社会性の発達の基本的な課題として「共同注意」が取り上げられている。多くの場合は、視覚的な情報を手がかりに生じている行動の分析が多い。この共同注意についても子どもの発達を「二項関係」「三項関係」という視点からみていくと、視覚障害や聴覚障害、また重度の肢体不自由があるとしても、その子どもが存在している世界を内的に構成していく上では、基本的な原則と考えられる。その意味では、感覚モダリティや表出行動のモダリティにかかわらず、その形成がどのような過程で展開していくかは重要な課題と考えられる。今後の大きな研究課題であろう。

また、臨床的には子どもの注意の方向や向け方を取り上げるということは、子ども自身の内的体験をかかわる大人が推測することにつながる。眼球の動きや身振り、しぐさなどのわずかな行動から、その体験を推測しつつ、かかわりを展開していくことは、障害が重度な子どもの指導の基本となるものである。その意味でもここで取り上げた共同注意関連行動は大きな意味を持つ。

ここでは、重度・重複障害又は重複障害を取り上げている限られた研究を概観したに過ぎない。その理由の一つは、発達初期に焦点をあて、共同注意が形成される前の段階について検討することが目的だったからである。今後は、他の障害も含め、幅広い研究を概観し、そこでの課題を検討する必要があるだろう。